

【7月号：バナナの国で平泳ぎ】

<水泳：指導法の違い>

僕の配属先では、年齢別で指導を行っていました。誰でも最初からクロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライを泳がなければなりません。たとえ3歳の子でもです。バタフライを泳ぐにはある程度の力と持久力が必要ですが、とにかく泳ぎながら技術を身につけるという指導がされていました。

この指導法のデメリットは、後で修正に時間がかかることです。指導者が適宜適切な指導を行えば効率の良い指導法だと思いますが、相手は児童なので大変難しいやり方です。年齢別で指導する限り、子どもの理解力や体力を考慮しなければなりません。メリットはプールに入ったその日から好きなだけ全ての泳法を練習できるということです。待つことにストレスを感じる子どもたちにはこの指導法が合っているのかもしれませんが。

日本のスイミングクラブでは泳力別に指導することが多いと思います。例えば、クロールが習得できたら次に背泳ぎを習うという指導法です。一つの目標を達成しないと次のステップに移れないので、児童によっては同じ練習を何度も繰り返さないといけません。練習の大切さを伝える必要がありますね。

日本人である私達はあらゆる場面で効率を重視します。その当たり前が任地では通じません。むしろ効率を重視することで効率が悪くなるというようなことが起きかねません。この違いが文化なのだと思います。普段は文化を壊さないように気をつけて活動していますがそれがとても難しいです。僕の活動は、とどのつまりいかに泳げるか（泳げるようになるか）を追求する仕事です。言い換えるなら、いかに文化に介入するかが僕の活動とも言えるでしょう。

<活動：半分が終了>

エクアドルに来てから1年が過ぎました。順調に始まるかと思った協力隊生活ですが、長い間体調不良に悩まされました。僕の活動ではプールに入り実技指導を行うので、体を思うように動かせなかった時期は悔しい思いをしました。辛い時期を乗り越えてからは今日まで大事に至ること無く活動を行っています。少し焦って働いたこともありました。そんな時は何もうまくいかなかったように思います。

それでも、取り組みの全てが良い方向に向かっている手応えがあります。伝えたいことが子供達を通じて指導者に理解してもらえたり、その逆もありました。練習前の柔軟体操はその一例です。柔軟体操は続けなければ意味がありません。以前より体の調子がよくなったという選手の言葉は、同僚達を刺激しました。水泳は全身運動です。選手達に体のいろいろな部分をストレッチさせるため、同僚達各々が自分で新しい体操を考えたり、見つけて来るようになりました。この取り組み方を僕は求めていました。



試合では結果が求められます。しかしスポーツの本質は勝つことだけではありません。結果よりもいかに努力するかが大切です。選手や同僚達の練習に対する姿勢は1年前とは見違えるものになりました。最近の試合では良い結果を残せる選手が前より増えています。練習への取り組み方が良い影響を与えているのでしょうか。暑さや標高の差と戦いながら自信を持って後半1年に臨みたいと思います。